

# 世界は二人のために 第二部

南 燈油

## 第二部 序

---

目の前の誰かが俺に言う。

「           を探して」

だけど何を言っているのかわからない。「           」の部分が聞き取れない。

「           にあるから」

また聞き取れない。

だから俺は訊き返す。何を探して欲しいのか、どこに行けばそれを見つけられるのか。

「           にある           を見つけ出して」

やはり聞き取れない。

ノイズが走るのだ。埋められているはずの空白部分に差し掛かると、テレビの砂嵐を思い出すような、耳障りな音が上塗りしていく。

目の前の誰かは落ち込んでいるようにも見える。誰なのか、顔もわからないし、声も聞こえない。どうして言葉が聞こえるのか不思議だった。

「助けて」

ああ、わかった。誰なのかかわからないが助けて欲しいのは伝わってくる。

だったら俺は探し出すだけだ。

どんなことをしても探し出す。

そして、見知らぬあなたを助けてあげましょう。

「さて、行くとするか」

明は言った。先ほどまで眠っていた俺を叩き起こしてから、今日これからどうする等と会話をした後に椅子から立ち上がった。

「で、結局どこ行くんだ？」

俺は座りながら問いかける。寝ぼけていたせいか、あまり明の話は理解できなかった。

「朝も言っただろ。星野の家に行くって」

「ああ、星野ね」と相槌を打つが、その星野という人物をよく思いだせなかった。

「まあ正直、見舞いに行く義理はないが、あいつ友達俺達以外いないみたいだから。俺や陽も友達少ないしな。気持ちわかるだろ？」

「少ないっていうか、俺はおまえ以外の友達を持った覚えはないぞ」

「そう言うなって。星野が可哀想だろ。っていうか前にもう一人いただろ、親友が」

そこで、はっと気づく。そうだった、授業中の居眠りの中で見た夢でそれを思い出していたのだ。

「神崎燐（かんざきりん）。今どうしてるんだろうな」

「さあ。連絡手段もないからあれつきりだ」

「陽はいいよ。お別れの手紙もらったんだろ？ 俺なんて何もなしだ」

「はは、燐がそれを聞いたら『陽君とは友達になったけど田邊君とは違う』とか言いそうだ」

「ありうる……………もしかしてあの時の俺ってお邪魔虫だった？」

「……………さあな」

「その間が全てを語っているからな」

この野郎、と明に小突かれる。

俺も椅子から立ち上がり「行くか」と明に言う。

「あ、ちょっと待て」

俺はそう言ってから自分の鞆を漁り、飾り気のない白い封筒を取り出した。

「ん？ 陽、それってあれだろ、西野先輩の手紙が入ってるっていう……………常に持ち歩いてたのか？」

「まあな。やっぱり忘れられないじゃん。だから持ち歩いてたんだ」

「で、中は見たのか？」

「まだ見てない」

「あれから二年経ったんだ、そろそろ吹っ切れ。会長にも失礼だぞ」

会長、たぶん星野という人物の家に行けば会えるのだろう。朝、明は「あそこの一家で流行ってるんじゃないか」と言っていたので、おそらくその二人は姉弟なのだろう。

それより今は、

「おいおいいきなりどうした？」

俺は封筒を二つに破った。一度も開かれることのなかった封筒は、中の手紙ごと真っ二つになる。それをさらに細かく破いていく。修復不可能なほどに破り捨てたかったのだ。

「それ唯一の形見だろ？」

「いいんだよ。中は見てないけど、書いてあることはわかる。こんな手紙には用はない」

「何かあったのか？」

「……………とにかく、戯言が書いてある手紙はこれで消えた。育先輩のことは、こんなモノがなくとも一生忘れない。忘れてやるものか」

「おかしいぞ、おまえ」

明が少し引いている。その反応は当然かもしれない。

そんな明を横目に、俺は細々となった紙切れをゴミ箱に捨てた。

「詳しい話は歩きながら話す。だからそんな変人でも見るような目をするな」

「いやいや、そんな奇行見せられて引かないわけないだろ」

「まあいいや。行くぞ」

「あ、ああ」

「ところで」俺は歩きだしてから気づく。「星野の家ってどこ？」

すると明は一瞬で動きを止めて、俺から目をそらす。

「……………行くのやめるか」

「薄情者」と俺は明に言う。

「と言うか陽、おまえ行ったことあるだろ。会長といつも一緒に帰ってるんだから」

\*

担任から星野の住所を聞き出すのは簡単だった。お見舞いに行きたいと言うと、担任の教師は「星野は転校生だから何かと不安も多いと思う。手助けしてやってくれ」と快く住所を教えてくれた。

そして、覚えのある住所に向け歩いている現在。明が俺がおかしいことを気にし始めたので、夢のことを事細かに話した。

「俺が陽にしてやれることはなさそうだ。悪い」

「いいよ。姉さんにも同じようなこと言われたし。ただの夢だろ」

「けど、会長のことも忘れてるとはどういうことだ？」

「わからん。ここ数カ月の記憶がないわけではないけど、その星野と会長のことは全く思い出せない」

「まあ会えば思い出すかもしれないし。ほらここじゃないか？」

住所の場所に到着。覚えのある住所だと思ったら、俺は以前ここに来たことがある。最近ではない、もっと昔に来たことがある。

「ここ、燐の家じゃん」

「神埼の？ そういえば、おまえ来たことあるんだっけ」

車一台が入るガレージには一台の車が、庭は雑草が刈られたばかりなのか草の先が刺々しく見えた。燐のことを鮮明に思い出す。急にどうしているのか気になった。

「まあそれは置いといて、インターホン押すぞ」

明はそう言うがすぐに呼び鈴を躊躇いなく押す。押してから数秒後、家の中から足音が聞こえた。鍵が開く音を認識してから間もなくドアは開かれて、中から同い年くらいの男が顔を出す。

。

「田邊と桜井？ どうしたの？」

「おお、星野元気そうだな。風邪は大丈夫か？ 見舞いに来てやったぞ」

明は先ほど買った飲料水を差し出す。

「風邪？ あ、ああそれ違うから。ちょっと家の用事で学校休んだだけ」

「はあ！？ なんだよ、心配損か」

「けど嬉しいよ。お見舞いに来てくれる友達って初めてだし」星野は照れくさそうにする。友達が少ないというのは本当らしい。「せっかくだし上がって行きなよ」

「お、じゃあ遠慮なくあがらせてもらおう」

「どうぞどうぞ」

明と一緒に家に上がる。靴をきちんと整えてから、家の中を見渡したが当然燐が住んでいた頃とはだいぶ違っていた。

「桜井？ うち来るの初めてじゃないのに何でそんな見渡してるの？」

星野が俺の行動に不自然さを感じたらしい。

「いや、そこにクモの巣があるなあって思って」

「うわ、本当だ。最近掃除してないからなあ」

咄嗟に偶然見つけたクモの巣を指差した。どうやら回避できたらしい。

「会長はいないのか？」

明が星野に言う。

「姉ちゃんは……………そう、外に用事があるとかで！」

「い、いやそんなに焦ってどうした？」

「何でもないから！」

「陽、会長浮気してるらしいぞ。おまえ捨てられたな」

「ち、違うって！」

「必死に否定してるところが怪しい」

「明あまり星野を苛めるな。違うって言うんだから違うんだろ」

「あれ、おまえ星野のこと思い出したのか？」俺に向かい、小声で明は言った。

「正直何も思い出せない。なるべく俺に話振るな、ボロがでる」

「わかった。思い出したら声かけてくれ」

星野がその後明が会長と呼ぶ人物、星野の姉が病院に言っていることを話した。そちらの風邪は本当らしい。

「ここ僕の部屋だけど、あまりいじくりまわさないでね」

「エロ本がたくさん出てきそうだな。星野ムツリスケベっぼいから」

そんな馬鹿な会話を交わしてから中に入る。室内は落ち着いた雰囲気、男の子の部屋だとすぐに感じた。特に何も無い室内。机、ベッド、本棚、テレビ、ゲーム等一般的な男の子の部屋だ。

「ふつつうだな。普通すぎる」

「悪かったね。今度は田邊の家にお邪魔させてもらうよ。参考にするから」

「俺の？ いいけど……………後悔するぞ？」

「もっと興味が出てきたよ。違う意味で」

明と星野が話している間、俺は室内を見回していた。ここは以前隣が使っていた部屋だ。あの時は、隣の女の子らしい可愛い部屋にどぎまぎしたものだ。使う人により印象がガラリと変わるものだと感心した。

机の上を見ると、勉強した後なのか消しカスが所々に散らばっていた。きちんと勉強しているんだなと思いつつ、何気なく倒れている写真立て手に取った。

写真立てにはひと組の男女。男のほうは幼い顔立ちを赤く染めて、恥ずかしそうに俯いていた。女のほうは、眼鏡をかけて後ろ髪を結び、無表情でこちらを見ている。男のほうは星野で間違いない。そして女のほうにも見おぼえがある。

「ちょ、桜井！ 勝手に見ないでくれ！」

一瞬で写真立てを星野に奪われる。

「なんだ、なんだ？ 俺にも見せてくれ」

明が星野から写真立てを奪おうと奮闘する。星野はそれを苦笑いをうかべながら回避し続けている。

「星野、その女の子と連絡取れるか？」

「どうしたの桜井？ まさか一目ぼれとか！？」

「そうじゃなくて」

「とった！」

俺が話しかけた所為か、星野が抱えていた写真立ては明に奪われてしまう。

「見ないでくれよー！」

「いいだろ滅るものじゃないし」

星野は写真を見せまいと必死に明から取り返そうとしている。

「明、お座り」

「俺は犬か！？」

「ふせ」

「だから俺は」

「じゃあ黙れ」

「……………はい」

「桜井と田邊の力関係がわからない」

星野がそんなことを呟いたが、俺たちの力関係は特殊ではない。

「それより、連絡取れるのか？」

「んー、一応電話番号は知ってるけど」

「教えてくれ。ついでに電話も貸してくれ」

それから星野は渋々俺に連絡先を教えてくれた。

「陽、どうしたんだ？ いつも変だけど今日は一段ときもい」

「俺の普通はそんなにきもいのか？」

「言っているのか？」

明の戯言は放っておいて、俺は星野から聞いた電話番号を子機に入力する。

「田邊、桜井どうしたの？」

「さあ俺にもさっぱり。っと隙あり」

「あ、返せよ！」

耳に電話を当て、コール音が鳴る。

「おお、女の子。彼女？」

「違うよ。友達……………っぽいもの」

「なんだその曖昧な関係。というかこの子どっかで」

コールの回数が十を超えたあたりに、電話の向こうに反応あり。

『もしもし』

男性の声だった。野太い声が耳に残る。

「あ、桜井です。すみませんが」

『えっとどちらの桜井様でしょうか？』

「どちらのと言われましても……………桜井陽です」

『はあ、それで何の御用でしょうか』

男は電話に慣れていないのか、または知らない相手からの電話で戸惑っているのか歯切れが悪い。

「たぶん知ってるんじゃないかな二人とも。彼女の出身はこっちらしいし」

「んー誰だ。絶対見たことある」

「神崎さん。神崎燐さんだよ」

電話の向こうはやけに騒がしかった。男の声のほかにも複数の男の声。

『燐さんとはどういったご関係で？』

「友達ですけど？」

『そうですか。申し訳ないですが今は御取次できない状態なので』

「燐に何かあったんですか？」

それから男は電話から少し離れたようだった。それから一分以上は待たされたらう。そして男はさらに歯切れの悪い声でこう言った。

『神崎燐さんは現在行方不明なのですが、何かご存じないでしょうか？』



「久しぶり」

そう私に問いかけてきたのは旧友だった。

「元気？」

私に問いかける声はまったく覇気がなかった。

らしくない、そう思った。

「何年ぶりかな？」

覚えてない。日を数えるのは遠の昔に諦めた。

「ごめんね？」

何を謝っているのか理解できない。

「でもどうしても諦められないから」

何のことなのかさっぱり見当がつかない。

私にどうしてほしいのか、それとも自己満足なのか。

「全力であなたの邪魔をします」

そして彼女は続けてこう言うのだ。

「これは現実です。残念でした」

それは私の台詞なのに。

だけど私はそれが面白くて笑みをこぼしたのだ。